The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	磐舟居士の思出話
Author(s)	藤澤, 章次郎
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 37-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88742
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

磐舟居士の思出話

藤澤章次郎

磐舟居士が歿せられてから既に六月を過ぎたが、其當時から雲行きの怪まれた財界が遂に大蹉跌を來したまゝ、其創痍が今に癒着もせずに其日々々を送つて居るかの觀があつて、折角これがために起つた内閣も、遂に靦然と打切りを聲明するといふ狀態であるから、屢々人から、『永田さんが居られたらば何とか解決せられたらう』と曰はれることを聞くのであつて、自分もまた左樣に思ふ節もあるが、實は我々門外漢の知るべきことでもないから、私は磐舟居士の他の半面の事に付いて憶ひ出を語つて見やうと思ふのであるが、居士は、年若い頃に我が泊園に通學して香翁先子の敎をうけた人であるから、從來泊園同窓會及び同窓個人が其恩惠を受けて居ることも少くなく、現に其歿せられるまで同窓會の幹事長或は委員長として盡力をして居られたのである、しかしこれは我塾に關する事であつて敢て此場合にいふべきことでもなし。又一面姻戚といふ關係にあるものであるから何彼と溢美に流れる樣に見られる嫌もあり。容易く感想を述べる譯にも行かぬので、心迷ふ次第であります。

何時であつたか明瞭には記憶せぬが、たしか石井商店の破綻の折であつたと思ふ、新聞紙上に『何某は彼より何を貰つた』とか『誰は何々のために利益を得た』とか、色々當今の有力者に關する裏面の話が記されたことがあつた頃、居士は偶然私の宅を訪はれて色々世間の話があつたが遂にかういふことを述べられた。

僕が若い時に老先生――門下諸君は先子のことをかくいはれる――の御講義を色々と聞かせて貰つて、左傳などは最面白く且つ參考になることもあつたが、僕が自分に深く感じて今まで守つて來たことで僕のために成つて居るのはただ『行不由徑』の一句だけだ。論語の講義で、此句に付いて老先生が『邪徑は捷路であるけれども危險が多い、平々坦々と正直な大道があるのだから單に眼前の速成を計つて小賢しいことをせぬのが君子の心掛けである』といふ意味の御話のあつたのを聞いて、誠に其通であると思ふた、それからは僕はただ此『行不由徑』でやつて來た。つい何か會社を建てるとかいへば、發起人になれと勸められたり頼まれたりするが、これは默つて居ても何程かの株は呉れるものである、これが一般にあたりまへの樣になつて居る、しかし僕は今日も色々株は持つて居るが、所謂權利株とか功勞株とかいつてたゞで貰つたものはない、皆相當の價を以て買つて居る、もし僕がうまく立廻つて一般の樣にただ取りをやつたら、もつと早くに今より幾十倍の富を得て居つたらう、しかし僕は『行不由徑』と念うてそれをやらなかつた。また始終人の世話をすることが

あるが、御禮を貰ふのが嫌いで皆辭つて仕舞ふ、若し何かの都合で辭ることの出來ぬ時は、大抵先方から貰ふた約倍位のものを以て返禮をする樣にして居る、そこで皆が『永田へ物を持つて行くと却て迷惑をかける』といふて、終には持つて來なくなる。それで其人々等は『永田は私利を謀る者でない』といふことを知つて吳れて居る。今日僕は世間から圓滿居士とか調停居士とかの綽號を貰つて居つて、何かの問題の起つた時に他の人で纏らぬことが、僕が仲裁役になつて圓く收まるといふのも、何も僕が仲裁がうまいのでもなければ又妙案があるのでもない、ただ皆が『永田は自分の損得を考へて居らぬ、何等私心がない』といふ風に私を信じて居て吳れるから僕の言ふことが通るのである。又此樣な事から皆が色々の事を持つて來て相談して吳れる樣になつたのである。

右は當日の居士の談の梗概であるが、居士が自分に持つて居られる、人をそらさぬ点や萬事に親切な点又大勢に通じて事の長短得失に明な点其他今日まで堆積せられた隱然たる重も味等幾多の長所美点を有して居られるに拘らず、只益を論語の一句に得たといはれる謙德はいばずもがな、私は此談を非常に面白く聞いた、又今までに色々話し合つたことの中で、此談ほど眞劍味に聞かれたことはなかつた。實は當日は他に何等差當つての要件もなかつたのであつて、居士は殆んど此話をしに拙宅を訪はれたかの感があつた。或は當時の世情に感憤せられた傍先子への報恩のために態々語られたかとも感せられたのであつた。

由來私はよく塾中の二三子のために此話を持出して聽かすのである、この『行不由徑』といふ語は實際我々が二三子に講ずる時に人並みの說明を加へ又これが正しいものであるといふ砭人世的の議論を加へはするが、普通に『不遷怒不貳過』等の語が修養上には彼に優つて大切な事の樣に我も人も思ふのである、豈知らんや一方は一身の修養卽心學的に必要であつて、他の一方は一代の事業卽處世的に必要であるのみならず、其作用のより大なるものあることを、私は却て居士より大に敎誨せられたのであつた。

世間に『論語讀みの論語知らず』といふ言葉がある、我々も其仲間である、是では讀書萬卷遂に無益であつて、居士の活學問こそ大に我々の學ぶべき所であらうと思はれる。又一面にはかゝる大作用ある人格が僅々一句の格言から生れるものであるといふことを見れば、更に學問の要の大なることを知るのである。私はこゝに居士のために最も深く印象づけられた此『行不由徑』の物語を述べて居士の人格をしのぶことゝしたのである。

（九月三日稿）